

眞宗々學と義門

住田 智見

一
若州妙玄寺義門靈傳師、本年一月二十二日、本山は特に贈嗣講に追叙す。師が我が宗學界に於ける地位は、實は多言を要せず。宗門内諸種の方面に學者も輩出し、又他の學解より宗意安心に關する詞遣ひ等を解釋せんと試みたるもの皆無には非ざれども、専門的の國語に於ける智識を以て、着實に公平に明確なる解説を與へたるものは未だ無かつたのである。而して義門の當時は兩本願寺に於ける宗學界には、是非師の如き國語専門の學者の要求せられたる時代であつた。其の一斑を陳べて見やうと思ふ。

二
和朝親鸞聖人の開かれたる眞宗であり、宗祖以

眞宗々學と義門

來國文を以て記述せられたる聖教類は澤山ある。隨つて宗の安心を述ぶるにも漢文體よりも國文體の方が一般に通用せられ、別して蓮如上人の『御文』によりて再興されたる本願寺では、『御文』に示されたる「聖人一流の他力の信心は、雜行をすて、後生たすけたまへと彌陀をたのむ」こと、教示し給ひたるより「たすけたまへとたのむ」の語に對する見解、徳川時代一般に學問の道開けたると共に、宗門にも西には學林東には學寮が成り立ちて、京田舎の間、漸次宗學に意を寄するもの増加することゝなつた。その結果として右「たのむ」の語「たすけたまへ」の語に異説を生じて來た。西本願寺では、義門の誕生少しく前寶曆頃より越前功存の『願生歸命辨』に三業歸命を高潮し、次で能化となりたる智洞が強くこの説を募りしよりのむの語は願生だの信樂だのと云ふ議論が非常の騷擾を起して來た。我が東派にも其影響を受けて研

究はますく精緻に入らざるを得なんだ。

既に東派初代の講師惠空より假名聖教の太切なることを注意されてより都鄙の學者みな其意を諒として研鑽して來たのである。而してその三業騷動の寶曆より文化頃までの東派には惠琳・隨惠の兩匠あり。其下に深勵・宣明・寶景・頓慧等輩出して宗學に各々異綵を放ちたりと云へども、純國語の立ち場より解釋したるものなく、隨つて其立説に或は無理が出來たり不徹底の點の有るものも已むを得なんだ次第である。

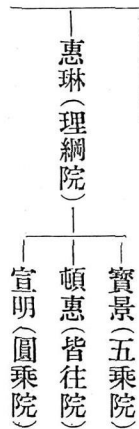
西派でも三業派の功存・智洞一派の學者の外大瀛・道隱等の學匠出で、相衡抗した。尤も『願生歸命辨』に對して寶嚴(東派)の『興復記』『歸命本願訣』の刊行より五十餘年に亘つて、この「タスケタマヘトタノム」の語の解釋は、立破、中々に盛んであり。著作も講筵も懸命に行はれ、文化三年有名なる本如上人の御裁斷書によつて、西派の三業

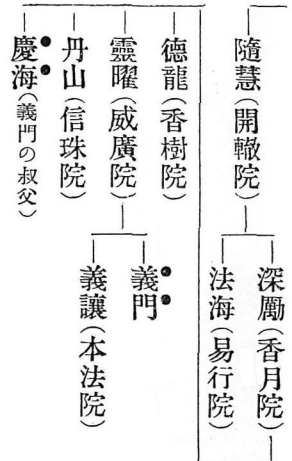
騷動は一時鎮靜に歸することゝなつた、(義門二十一歳)。けれどもこれは宗學の根柢より斷せられたるもので、語學上の解説に於ては尙ほ明了とは申しがたく、且つ當時その爲めに著はされたる刊行書も、語學上では不徹底の點あるを免れぬやうに見ゆる。勿論東派學匠の内この點に隨分注意される深勵師の辨さへ、然るものあるに於ては、他は推知すべしである。

三

義門師が宗學上親しく指導を受けたるは、威廣院靈曜贈講師にて、名古屋飯田町養念寺に於てせられたことであらう。其學系は略して左の如くである。

惠空—惠然—





義門師の文政五年九月(卅七歲)丹後に講せられたる『唯信鈔講說』卷上第四會に依れば「信する、たのみ」の取扱ひに付き「當春養念寺擬講ニ書付ヲ以テ評ヲ乞ヒタレハ」云云の辯あれば、其以前靈曜師に從學せられ、此時更に書狀にて質問したるものなることが知られる。勿論靈曜師は此年十一月歿せられたのである。

靈曜師の外前表の學系に見えたる諸師は義門の直接間接に教を受け又は交際したる人なること師の講辯及び傳記に於て知ることが出来る。

慶海は義門の叔父、内外の學に達し、義門を能

く提撕せしは、實に此慶海である。香月院深勵の指示を受けて『御文』の異本を校合し、越後高田本誓寺の『十帖御文』等を世に紹介したるは此人である。慶海に『御文成語考』等の著ありて世に行はれて居る。

香月院深勵・威廣院靈曜の兩師が尾州五人男と稱するものゝ異安心問題に關し講職を預かられしは文化八年春(義門二十六歲)のことで、其時悅淨と云へる人此問題の爲に大に苦辛したりと云ふ。若し此悅淨が義門の丹後願藏寺へ入寺したる時の(寛政十一年四月十四歲入寺、文化四年兄實傳死去同五年一月二十三歲にて實家妙立寺に歸住す)改名悅淨のまゝ傳へられたるものとせば、一は宗義の爲、一は師の恩誼に報せん爲に盡力したることを思はしむるのである。

四

義門師が學生の盡力は所謂和語說にて、國語學

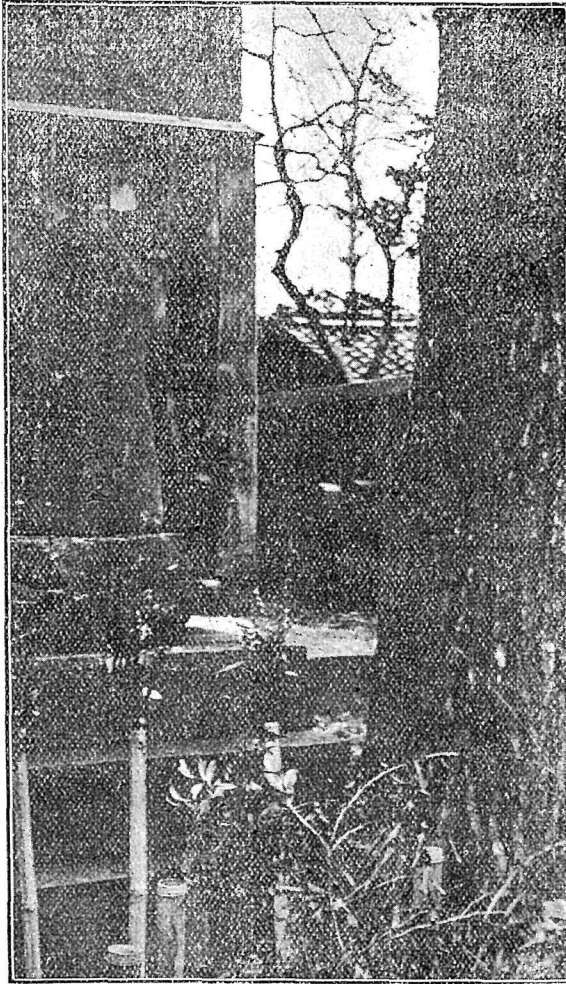
上より聖教の語意を明確にせんとされたのである。随つて三經の訓點御延書より下は蓮師の『御文』に至る

とたのむ」とある語である。そのことは『唯信鈔講說』『御文一帖十五通講義』『末代無智御文和語

迄、精細に其専門的解説あるは、一々申すまでもなくそれが亦一般國語學上の應用説明となるべきものである

る。中に於て善門が深く潜心研究し語學の上から時々解説を申されたるは『御文』の「たすけたまへ

訓菜』の説)や『歸命本願訣』の信字を訓する説などを評するに、和語の上よりするは勿論なれども、



(内境寺玄妙町濱小)墓の門義

說』などに辯せしものである。これに就いての用意を見んとせば『唯信鈔講說』にも田の實の解(谷川士清の『和

それには「此要論私共口元ノ乳臭キ者ノ能ク辨別
スルコト所不能ナレドモ、幸ニ香月院・皆往院・
易行院・威廣院師々ノ教ヲ蒙リ粗是ヲワキマフル
様ニナレルハ難有コトナリ」とて信するたのむを
體一義別の意で詳論してある。

又和讃の「大心力ヲ歸命セヨ」の草稿本左訓に
「タノム反ヨリ反」等とある反の語は「トヨム」と云
ふことなりとて『萬葉』十六『和名抄』を引けるなど
（唯信鈔講説、末代無智和語説）みな師の考へ得ら
れた所である。

又言靈幸ふ國の和語と漢字との對配に關して
も、常にその主従を辨へてかゝらねばならぬと注
意せられ、「たのむ」の語でも漢字に配する時はそ
の義一二にあらず「まこと」の語も亦種々あり。そ
れを深く雙方より注意して考査せねば誤謬に陥る
であらうと申されてある。

又我真宗に於ける列祖の聖教を見るに、和語の

取り扱ひに變遷あるに注意された。即ち『末代無
智和語説』の最初に

真宗ニ於テ元祖聖人祖師聖人以下經論釋ノ御延
書、或ハ漢文ノ聖教ニ御付ケナサレタル御訓點、
或ハ御假名文ノ聖教、御和讃御文の御詞遣ノ趣
ヲ、總ジテ伺フニ、凡ソ三通リニ分チテ伺フベ
キ歟。

と云ひ次第を逐ふて其變遷を叙してある。

マツ元祖聖人祖師聖人の御詞遣ハ、ワザ／＼俗
言ヲハブカンノ、イトハセラル、ノト云フ思召
ハ、ナケレドモ、自ラニ俗言アマリマジラズ、
古ヘ雅文ト稱スルニホヒアリ、云云

サテ覺如上人存覺上人ノ頃ハ、世間一統元久時
分ヨリハ、言遣ヒイヤシクナレル時代、爾ニ御
製作ノ聖教類、純一和文ニハアラズ、或ハ漢文
ヲ假名書ニナサレタルガ如キアリ、或ハ古文ヲ
御マテビナサレタカトミユルアリ、サレドモコ

レハ元祖ヤ祖師ノ任運自然ノ御言遣トハ違ヒ、大分御意ヲワザ／＼用キサセラレテ、ナルダケ

花ヤカニナル様、イヤシカラヌ様ニト、文章ノカタヲ思フ思召、其上第一達意ヲ主トシテ、而モチトハデイニ御執筆アラセラレタリト、恐乍ラ伺ハレマス」云云

サテ八代目善知識(蓮如上人)ハ、一體ノ思召、右等ト同ジキニアラズ、愚夫愚婦ノ耳ニ入ヤスクシテ、サシアタリ法義ノ得益ニ於テ、速カナランコトノミ、思召タルモノト存ゼラレマシテ則御自身の御詞ニモ、タゞ勸化ノ一通リナレバトモ被仰、手仁波ノワロキヲバ、吾咎ト云ベシトモ被仰タル事、金森ノ記ヤ天正十三年ノ實悟記ニ明カナリ」云云

されば『改邪鈔遠測』には覺如上人の文體を定むるため、造語雅俗の二科を設けて、覺師では「御文ノワザト雅ヲステ、俗ニ從フトハ異ル」旨ヲ詳

辯してあり。これらの着眼は宗門の學匠中、師ならで能くなしがたい點である。

かやうの見方よりして純雅純俗等の文體とその時代とを能く見定めて、而も精細なる國語學の知識を以て講説されたので、宗義の點は相承の定判と先輩の指導とに依準するは勿論れども、國語の點になると、内外の學者に對して少しも憚る所なく批評も加へ立説もされてあることは、その講説上に見えてある。

五

要するに和國に顯はれたる宗門の聖敎は、時代の晦明に隨ひ、文の雅俗等の異なるは、自然の事なれども、其を一般の學問上より批判し、宗學の根本主義より見定めて、以て宗意安心として太切に取り扱はるべき「後生たすけたまへと彌陀をたのむ」の語義と「信ずる」とある義意とを、明確に論定さるゝことゝなつた。

これ古來の宗學者の最も大切としつゝ、尙且つ未到なりし方面を研覈して、公正なる結論に到達せられ、宗學の新正面を發揮したるの功は、蓋し千古不朽の功蹟であらう。昨年大演習に當つては、國語學の功に對して、朝廷より贈正五位に叙せられ、本年は我本山大谷派本願寺に於ては、宗學上の功に對して嗣講を追贈せられたり。忠實なる研鑽は時代を逐ふて、いよゝ其眞價を露はすものと云ふべきであらう。

私藏義門上人の書簡

吉澤 則

義門上人の國語學に於ける地位は既に定論のあることで、今更事新らしく説くにも及ぶまい、師が或は氏爾乎波の上に或は活用の上に或は音韻の上に、古人の説を補ひもし、訂しもし、又先人未

發の新説を闡明して、終生倦むことを知らず、病懣日に甚しく、命旦夕に逼りながらも、床上書筆を變せず、學事を講談されたといふに至つては、その學に忠なるに感泣せざるを得ないのである。

師はかくて得られた深い國語の知識を以て、宗祖見眞大師を初めとして、世々の宗師の述べられた和語聖教を解釋せられた、師が半世を國語の研究に委ねられたのも、畢竟和語聖教を正解して、そこに宗旨の眞諦を索めやうとせられた爲では無かつたかと思ふと、一層師の學風が慕はれて、渴仰の念を増すのである。

余は義門上人を追慕する餘り、その眞蹟二三を獲て珍藏してゐる、其の内多少師の傳説を補ふ資料ともならうかと思ふから、左に書簡を紹介しやうと思ふ。

北條出府ニ付云々之貴翰、三月七日於京拜見、其翌京立、備中長尾へ來居、於是御再答、今日